

## 「大里総合管理(株)にみる地域貢献活動」 天明塾長講話

今日、お話をさせていただくのは大里総合管理(株)、野老真理子さんという女性社長です。何をやっているかという、草刈りをやっている会社なんですね。不動産管理会社なんです。野老さんは創業者じゃなくて、お母さんが仲間と一緒に小さな不動産会社をやっていたんです、千葉県で。ところが、真理子さんは東京でキャリアと言われるような仕事をしていた、楽しくてしょうがなかった。そんな時にお母さんが、千葉県の田舎で、「真理子、帰って来てよ、もう仕事が忙しくてしょうがない」「ダメよ、私もすごく忙しい、大事な仕事をしているんだから、そんなお母さんの手伝いなんてできない、不動産の管理なんて」「そんなことを言わないで、お母さんも年を取ってきて、お前が来てくれないと」と言われて、やむを得ず大事なキャリアの仕事を辞めてここに来た。ここに来た時に決意したことが4つある。

- ①きちっと社会に認めてもらえる企業になろう。
- ②女性だからこそできる発想を大事にしよう。
- ③自分は大網という地域を知らなかった。ずっと東京で仕事をしていたから。だからこそこの大網白里市の魅力を感じることができた。この地域を良くしよう。
- ④小さいからできる、小さいことを武器としよう。

この4つを決意し、そしてやり始めるんです。徹底してやっていることは、環境整備と地域貢献活動です。

3. 11、震災当日、ここも地震で信号が止まって停電したり、水も1メートル何十センチ、随分水が入ってきたんですが、とにかく停電になった。社員達は皆、外に出掛けているわけだ。大地震で、「とにかく帰ろう」と言って帰ってくる途中、信号が止まっている。この社員は、「信号が止まっている。誰かが信号をやらなくちゃいけない」と言って、皆、車を脇にして交通整理をやる。指示も何もしないんだけど、うちの社員が勝手に帰る途中、交通整理をやってきた。「これ、まずいな」と気がつくや、そういうふうはこの会社はなっちゃっている。

どのくらい貢献をやっているかという、30数人の会社でこういうボランティア活動が今は200件を超えているんです。

昔は社員、1人3つの地域貢献をやろうよと言っていたのですが、今は違うんですよ。住民1人1貢献ができるよ

うな仕掛けづくりをやろうというのがすごい。7万人の市民として、学生とかを除けば実質動けるのは1,000人かそこらはあるだろう。そうしたら1,000ぐらいの社会貢献活動、地域貢献活動があったっておかしくない。一人ひとりをスターにしようというてやっている。それで1,000ぐらいいくかもしれない。今は220とか230とか言っているからね。貢献と言っているので地域貢献活動の責任者をやる。今、住民1貢献を目指しています。コツは無理をしないこと。

「先生ね、仕事には2つあると思う」と社長はそう言うわけです。売上につながる仕事、利益につながる仕事、それが1つ。でも、もう1つ、売上にもつながらない、利益にもつながらないけれど地域が良くなる、住民が喜んでくれる、それも私達は仕事だと思っている。どっちが大事でどっちが大事ではないという優先順位はないんだ。両方仕事だから、両方一生懸命大事にやっていく。

社会貢献活動の具体例をいくつか紹介します。学童保育の責任者はこの野老真理子さんがやっています。この学童保育、2階が板の間でフリースペースになっているので、ここで子ども達が遊べる。お母さんが連れて来た子どもを受け取って、遊ばせておける。「今日は天気がいいから、皆で公園に行こうか、皆、下りてきて」と。社長が責任者だから、仕事の合間に、「じゃあ、忘れ物がないように持って、はい、行きましょう、並んで」、それで公園に着くとまず何をやるかという、「遊ぶ前に、ゴミ袋がここにあるから、皆でゴミ拾いをしましょう」と言って、皆、子ども達がゴミ拾いをするわけだ。そのゴミ拾いが終わったら遊んで、最後またこのゴミを持ってきて、会社のゴミ箱にきちんと分けて捨てる。お散歩一つでもそこまでやる。

そうすると、お母さん方が、「うちは市の保育園に入れているけど、そこをやめさせて社長のところに入れてくれない?」とか、そういう状況ですね。

学童保育は、夏は2週間、林間学校をやっている。地域の小学校、30人も40人もやっている。それは会社の人が関わらないで、5年生以上の子が先生になって、2～4年の子を皆、面倒をみている。2階でやっているわけだ。

1階はオフィスだから、朝、「朝令」というと2階の生

徒も全部下りてきて社員と一緒に朝令をやる。2～4年生がきちんと30分の朝令を、皆、社員と一緒に立って、経営理念の唱和という、一緒に暗記をしたのをしゃべるんだよね。5年生の子にちゃんと、給与とは言わないんだけども手当を払うんだって。新札の千円で払うと言っていました。「先生、面白いね、お母さんからもらったお金はすぐ使っちゃうけど、ここで働いてもらった千円札は、皆、貯金をするのよ。こんなことは児童労働だから法律ではそんなことをやってはいけないけれど、うちは大丈夫なんだ」とか何とか言って。

ここでやっている社会地域貢献活動、皆、行政の許可を取らずにやっているんだって。「行政の許可を取ったら、こんなものはどれ1つ、やることはできない」みたいなことを言っていたね。

未だに3.11の被災地のボランティアバスツアーというのをやっている。これも地域貢献活動の1つなんだけれど、3.11のあったその8日後、3月19日にトラック2台で食品を運び、そして4月10日にバスでいわきに炊き出しをしたことがきっかけになって、以降、毎週金曜日の夜から土曜日の夜まで、1人3,000円で市民から参加者を募って、東北支援をやる。去年の8月18日現在、132回やっている。未だにやっているんだよ。「先生、私はまだ80回しか行けてないけれど」と。このために中古のバスを買ったり、社員がその大型バスの免許を自分で取ったりしている。

そして、ワンデイシェフ。2階がフリースペースになっていて、そこで食堂をやっている。会社の社員が昼にコンビニ弁当を食べているわけだ。「ダメだよ、コンビニ弁当を食べていたら、体を壊すよ。しょうがないな、じゃあ私が作ってやる」って、社長の真理子さんが自分で、コンビニ弁当を買ってくる社員のために弁当を作った。これがスタートなんです。「余っちゃった。じゃあ、外の人に食べてもらうわ」「それならば、ここでもって限定30食に限り社員だけじゃなくて外の人もお迎えしよう。30人はゆっくり座れるので」と、そういうこと。社長がそういうことをやっている、知り合いの人が、「真理子さん、いいね、私も実はお料理をやっていたんだ。私はイタリア料理だけれど」「いいね、俺は蕎麦打ちをやっていたんだよ」とか、そういう人がいっぱいいるわけだ。「分かった、じゃあ月曜日は日本食、佐々木さん、やって。火曜日はイタリアンレストランで、木村さんの奥さん、やって」と、こういうふうにしてやるわけだ。

それで材料は全部このシェフ持ち。売上の70%は本人にやるわけ。だから、このシェフ達は売上の7割で材料などを準備してちゃんと利益を取っている。「先生、うちのワンデイシェフから、独立して飲食店をやっているのがも

う3人出た。これからもどんどん出て行くんじゃないかな。そうそう、住民をスターにしていくわけだ。住民1人、1貢献をさせていこうと。

「木下さん、この間、会社を辞めたね」「木下さん、確か山岳部だよね。あのさ、昼間、何をやっているの?」「何もやってないの」「あの人、山岳部で山歩きが好きだったから、うちはグリーンツーリズムの地域貢献活動をやろう」それで辞めた彼にリーダーをやってもらって、月1回、グリーンツーリズムのお願いをすとか、そうすると彼も生きてくる、ワンデイシェフも生きてくる。

最後、「先生、この地域貢献活動をやっていると地域が良くなる、社員が一人ひとり成長する、そして売上が自然と上がる。広告宣伝をやったりするんじゃなくて、地域貢献だけやっていると成長する」。だから、ここは業績がいいよ。売上は5億か、6億、そのくらいだけれど、売上の1割か2割ぐらいはちゃんとそれでも利益を出しているところだから。

どうか、これを全部真似るということではないのですが、働きに2つある、それをやっていると多分日本が良くなっていく。こんなことを、僕は本当に信じてやみません。どうか一つ、目指していただければと思います。

# 「あおもりを豊かなコミュニティにするために」

講師 若井 暁 氏 [青森魚類株式会社 流通企画室 室長]

皆さん、こんにちは。

私は若井暁と申します。今年で38歳です。本日、皆様とお会いできることを大変楽しみにしてきました。

この青森県、日本も全般的に人口が減っていますよね。25年後になりますと、日本国全体は1億人を割ると言われています。約9000万人になる。そうすると、青森県全体も100万人以下になるということが分かっています。

私達は、これから先、少なく見積もってもあと40年はこの地で暮らしていくわけですよね。その時にどういうことをしたらいいのか。それは、各々がやはりまず仕事をしなくてははいけません。もう1つは、やっぱり地域に対する貢献だと思えます。両方やらなくてははいけないんですよ。これ、なかなか難しいんですよ。ところが、都会では仕事だけをやっていても順風満帆でお金ももらえていて、人口もなかなか減らないから、そういう危機感がないんですね。

今日、皆さんにお話をするのは、1つは青森のねぶた祭、もう1つがあおもり立志挑戦塾の話です。最後に会社、仕事の話をしていこうと思います。

一番初めにねぶた祭の話します。ねぶた祭は、今から300年くらい前に始まったお祭りだと言われています。しかし文献がありません。その一番の理由は、祭礼、神社とか仏閣とかに納めているお祭りじゃないということです。つまりは、市民達が始めたお祭りなんじゃないかと言われています。

うちがねぶたに携わっているということがありましたので、早くから色々なことにチャレンジできました。まずハンガリーに19歳の時に行きました。これは私にとっては本当にいいことでした。その後の転機につながったのです。2001年にイギリス大英博物館にねぶたを展示します。それにも関わることができました。また、2006年にお囃子の会を作って、2007年はアメリカのロサンゼルスに行きました。それから11年に「ハネトマスタープロジェクト」を立ち上げまして、あとは「青森マラソン勝手に応援プロジェクト」とか、3.11で被災地になったところにねぶたを持って行って運行をしています。

ハンガリーに行った時のことです。この時に私は囃子方として行ったんですけども、ハンガリーは英語が通じません。ハンガリー語、いわゆるマジャール語というのですが、日本語よりも圧倒的に難しいです。日本語は母音が5つしかありませんが、ハンガリーは地域によって32、一

番小さいところでも18の母音があります。それを駆使してお話をしなくてははいけないので、全くといっていいほど通じなくて、買物にも不便でした。ですけど、お囃子を鳴らすと皆、跳ねたんです。ちょっと教えただけで皆、跳ねました。こんなお祭りは見たことがないと言って。あとは視覚で圧倒されました。そこで僕は、このお祭りは世界に通用するということを確認しました。19歳の時です。

この後に、何か世界に羽ばたけるようなことはないのかなと思って、大学の時にイギリスに留学をします。その御縁で、その後、大英博物館で飾る時に、色々暗躍することができたんです。

この他にも、私が考えたのではないんですけども、「ねぶたBIZ」という、JRCの会員の方が考えたのを色んなところでお話をして、それから行政の方にもお願いをしました。一番初めにやっていただいたのはみちのく銀行さんです。窓口業務をしている方、それから空港とか、それからタクシーに乗っている方がねぶた祭、もしくはねぶた祭、三社大祭の期間中とか期間前の時に衣装を着て、おもてなしをしたらどうだろうと。

外から来た人ももちろん喜ぶけれども、地元の方も喜ばないはずはないと。そういう気持ちをやってみたらどうですかと。しかも、半纏、法被というのは安かろうで外から買うんじゃなくて、内需拡大で青森県から買ひましょうよと、そういう提案をしました。

シンポジウムの時に市長に来てもらったかな。要は逃げられないようにしました。その時に、「やりますよね」みたいに。でも、それぐらいしないとなかなか行政を動かすということではできないと思います。

これがきっかけで、今では銀行さんがメインでやっていただいているんですけど、青森市もやっていて、あとは2014年になって弘前市、五所川原所市にもこの活動をしていただいています。でもこれは他の地域に行くと当たり前に行っているんです。

皆さん、福岡空港に降りられたこと、ありますか？例えば、沖縄に降りられたこと、ありますか？その祭り期間はちゃんと法被、民族衣装を着ておもてなしをしているんですよ。青森だけなんです、してないのは。青森駅に着いた時に皆、普通の格好。最近はちょっと着ている人も多いんですけど。その辺の意識の欠如ですよ。その辺の意識の欠如で人口が減っていていると思うんですよ。来てくれる人がいなくなっている原因は、うちなんですよ。それを皆さ

ん、分かっているけれどなかなか口にも出さないし行動しないんですね。これからそういうのをちょっとずつ増やしていこうと思ってやっています。

今、私がやっている仕事の話。得意分野は魚卵です。

キーワードは色々あるんですけど、16万キロというのがキーワードです。

地球1周、約4万キロです。16万キロということは約4周ですね。これは何かというと、フードマイレージという言葉 皆さん、御存じかもしれませんけれど、ここを読んでいただきたいんです。輸送に伴う負荷が少ないであろうという仮説を前提にして考え出されたもの、つまりは自国のものを消費すれば、移動をしなくてもいいわけですよ。ところが、安かろう、悪かろうを手に入れるために、どんどん日本は外に出て行って、物を輸入しています。

例えばですけど、とあるコンビニエンスストアで幕の内弁当を作るのに必要なフードマイレージが16万キロと言われているんです。1つ例を出すとすると、鶏肉はブラジルのものを使うとか。安いです、すごく安いです。でも、自国でいいものがあるのに、なぜ安くなければいけないんでしょう。それって、青森の人口が少なくなっているのと、実は答えがリンクしているような気がしてならないですね。人口1人当たりのフードマイレージ、日本が7万でトップですね、先進国の中で。よく比較されるアメリカ、韓国よりも断トツです。ドイツ、イギリス、フランス。こんな感じになっているんですよ。

自給率、日本はたった50年前まで74%もあったんです。自国の自給率が。今は約40%ですよ。じゃあ、他の先進国は。アメリカで120あるんですよ。ドイツで91、イギリスで75。2011年ですけど、日本は外国から6兆も買っているんですよ。6兆円ですよ。

私も食に携わっている仕事をしていますけれど、これはどうにかしないとイケません。おかしいです。こんなことをやっている国は、200カ国ある中で日本だけです。

そろそろまとめに入りますが、物事を受け入れる時に「あなた、選ばれていますか」、これは大事なことなんです。総理大臣って、やってほしい人っていうと、多分政治家じゃないはずですよ、皆さん。そういう人がやってくれたら、まあ良くなるかどうかは別ですけど、やっぱり立候補じゃなくて選ばれた人がやった方がいいんじゃないの？

それから闘志はくすぶっていてもいいから燃やす。会社の中では静かに業務をしていただいでいて結構。

それと、会社とか家族に言えないことを言い合える仲間がどれだけいるか。これはすごく大事です。

それから人に優しくできるか。人に優しくできる人というのは、必ず辛い経験をしています。そういう痛みの分かる人じゃないと人には優しくできません。うわべだけでやる人間はいっぱいいますけれどもね。でも人に優しくできるのがキーワードだと思います。

あと、移動時間が人間を成長させるというのは、これは寺島実郎さんにも言われてそうだなと思ったんですけど、仕事が忙しくてなかなか移動ができない人もいっぱいいると思うんですよ。でも、お休みの時に、例えばどこかを見に行くだとか、出張という意味だけじゃなく、その移動をしている間に色々物事を考えています。私もそうなんですけれど、普段読まないような文章を読んだりとか、聴かないような人の講演を聴いたりだとか、その移動をしている時間の時に色んなアイデアが生まれますから移動をした方がいいです。これは本当です。

地味でも継続をしていくことがあるかどうか。派手なことはよく取り沙汰されますし、例えばあおり立志挑戦の会の中でも一番取り上げられるのは「あおりマルシェ」です。派手ですよ、すごく。でも、実際にマルシェで活躍している人達の動きは超地味ですよ。でも、継続している。

あともう1つ、ゴミ拾いをやられている方がいます、ずっと、毎週月曜日、早朝にやっている方がいます。それもすばらしいことです。同志がどんどん増えています。そういうことをやっていることがあるかどうか。

私がやっているねぶた、仕事、ARCの共通点は「継続」です。全ての源というのは人ですから、人が育成されるといのは、成果が目に見えにくいです。

なかなかお金ももらえなかったりするんですけども、目先の利益じゃなくて、やっぱり考えるのは10年後、20年後、その先、よりできる人達を育てる、サポートする。今、うちのOBの人達がやっていますけれども、こういうのを皆さんが、まあうちの塾だけじゃなくていいですけど、やっていていただけたらなと思っています。

ということで、ちょうど時間となりました。

御静聴、ありがとうございました。

## ■ 「私が考える地域貢献プラン」

### グループディスカッション

塾長講話、ゲスト講話を踏まえながら、「現在自分が住んでいる市町村内で自分が実際にできること」を前提条件に、地域貢献プランを作ってみる。

グループ	論 点
A	「イワサ食堂」：地域食財の発掘、土地を訪れるきっかけづくり、付加価値の創出などをねらう、県産食財を活用した食堂の運営。
B	「走って拾って温泉プラン」：最後に温泉に入ることを目的に、ジョギングしながら清掃活動。第1回開催場所は浅虫温泉。
C	「冬の安全プロジェクト」：雪による視界不良による事故増加への対策として、学校、保育園等の周辺など、危険地域を特定して降雪前までに情報収集し、マップ作り。